

義教撰『浄土真宗論客編』

——仏土論を中心に——

庵 谷 行 遠

一 はじめに

日蓮宗と浄土宗との論争は、江戸時代に盛んに行われ、安土宗論が特に知られている。しかし近世における日蓮教団が関わる宗論に関する研究は未だ充分になされているとはいえない。先行研究として、稲田海素氏の「宗論書解題」があるに過ぎず、具体的内容の考察に踏み込んだ研究はこれまでにない。『浄土真宗論客編』は、浄土真宗の学僧である大心海義教（一六九四—一七六八）の著書であり、真言宗・日蓮宗からの浄土真宗批判に対して記されたものである。⁽¹⁾ 小稿では、日蓮教学への反駁について検討する。

本著作に対して、後に光円日相が『決権実義』を著し、さらに義教が反論するという応戦を繰り返す流れとなった。

ここでは特に仏土論に注目して考察する。問者の「阿弥陀仏国は報土であり、地前及び二乗は決して往観をえず。」という批判に対し、義教は「仏願力は凡夫をして報仏を見るこ

における日蓮宗への論駁

とをえしむ。」と答えるのである。この考察を通じて、近世における日蓮宗教団が関わる宗論の一端を明らかにする。

二 「仏力」の解釈

『浄土真宗論客編』には、客の立場からの主張として仏力について次の記述がある。

客曰、比丘説、衆生勵^ニ身心、尽^レ分而修^レ善。乞^ニ救^ニ於本尊^ニ、則其
 仏・菩薩、為加^ニ威神力^ニ、令^ニ人滅^レ罪増^レ善得^レ道。如^レ是説者、
 為^ニ真他力^ニ。放^ニ任^ニ仏力^ニ、不^レ加^ニ自修^ニ。謂^ニ之他力^ニ者、是妄伝而
 已。往生極樂亦其危哉。⁽²⁾

このように客の主張は、衆生は身心を励まし、なすべき務めを果たし、善を修して本尊に乞えば、神力を加えて得道することができるとし、これが真の他力であって、仏力に放任して自らは何も修行しないという説はみだらな説であるといふのである。これに対し義教は、四句の説を設けて如来の力に依ることは他性の説であるとして否定する。

然仏、大悲為利物故、隨緣逗機。設四句說。如說諸法從「自心」生、心外無法、是自性說。如說衆生由「聖力」故能得道等、是他性說。如說諸法從「因緣」生、是共性說。如說諸法實相本有、是無因說。四句融妙。畢竟無二。(中略)若執此所見境由「淨心」故生者、則同「外道自性見計」。若執由「如來加力」故生者、則同「外道他性見計」。若執由「内外和合」故生者、則同「外道共性見計」。若執此境自然生者、則同「外道無因性計」。縱誦五車、逐語奚曉。(中略)吾祖所以斥加「自修功」者、為遣下他力為「不慚」、別貴「己功」之情耳。非謂「放任」仏力、勿修三業善矣⁽³⁾。

ここでは、衆生が聖力に由るが故に悟りを得ることができると考えることは、他性説であり、若し如來加力に由るが故に生ずると執著すれば、則ち外道他性の考えと同じであるとする。自力の修行による功德を斥けるのは、「他力をして心よしとせず、自らの功德を貴ぶ心」をおいやるためだけである。仏力に任せて三業の善を修することを制止すると言うのではない、と主張する。すなわち、仏力に放任しているのではないと考えているのである。なお、四句の説の根拠として『浄土真宗論客編』は『涅槃經』の「一切法無「自相・他相及自他相」無「無因相」⁽⁴⁾」という經説を典拠としている。

三 『浄土真宗論客編』における仏土論

仏土について客からの批判として次のような記述がある。客曰、比丘説、弥陀仏国者、是真報身土、登地大菩薩、方能得

義教撰『浄土真宗論客編』における日蓮宗への論駁(庵谷)

感見。地前及二乗、決不⁽⁵⁾得往觀。何況凡夫不足⁽⁵⁾言耳。このように弥陀仏国は、報身土であり、地前及び二乗は決して往くことができない、凡夫はなおさらである、という客からの批判に対し、善導の『觀無量寿仏經疏』卷一の次の文を引用して回答している。

問曰、弥陀淨国、為当是報、是化也。答曰、是報非⁽⁶⁾化。云何得⁽⁶⁾知。如大乘同性經説。西方安樂阿弥陀仏、是報仏報土⁽⁶⁾。

その上で義教は「然仏願力能令凡夫修觀行人、得⁽⁷⁾見⁽⁷⁾報仏。」と主張し、「仏力」は凡夫を報仏に見えさせることができる力を有していて、「仏力」によって凡夫は報仏に見えることができる⁽⁷⁾と説く。この意見は善導の説を超えるものではなく、あくまで真宗の教理に立脚した回答であり、ここに義教独自の教理は見られない。

四 『決権実義』における仏身論

『浄土真宗論客編』に反駁した書である光円日相の『決権実義』について検討する。『決権実義』には次の記述がある。

妙法是親。諸仏為子。故結經云、此方等經典、諸仏宝藏。十方三世諸仏眼目。出⁽⁸⁾生三世諸如來一種。又云、仏三種身出⁽⁸⁾生方等。以⁽⁸⁾種為⁽⁸⁾父、能生為⁽⁸⁾母。敬⁽⁸⁾其父母、則子必悅。親一子多。其所⁽⁸⁾敬寡、而悅者衆。奉⁽⁸⁾法華親、諸仏子悅。無⁽⁸⁾仏非⁽⁸⁾子、故持⁽⁸⁾法華、無⁽⁸⁾仏不⁽⁸⁾悅。

このように『法華経』を親、三世の諸仏を子と定義し、「結経」として『普賢観経』を引用する。すなわち、方等經典は三世如来を出生する種であり、『法華経』を親、三種身・十方三世諸仏を子としてとらえている。引用の典拠である『普賢観経』の経説は次の通りである。

此大乘經典、諸仏宝蔵。十方三世諸仏眼目。出生三世諸如来一種。持此經者、即持仏身、即行仏事。当知、是人即是諸仏所使。諸仏世尊衣之所覆、諸仏如来眞実法子。汝行大乘、不断法種。

此方等經是諸仏眼。諸仏因是得具五眼。仏三種身從方等生。是大法印。印涅槃海。如此海中能生三種仏清淨身。此三種身、人天福田、応供中最。

ところで、当該の経文は日蓮の遺文に引用例が確認できる。

『四条金吾釈迦仏供養事』には次の記述がある。

三身事。普賢經云、仏三種身從方等生。是大法印。印涅槃海。如此海中能生三種仏清淨身。此三種身、人天福田、応供中最云。

また『観心本尊抄』には次の記載が確認できる。

普賢經云、此大乘經典、諸仏宝蔵。十方三世諸仏眼目。乃至出生三世諸如来一種。乃至汝行大乘、不断法種等云云。又云、此方等經是諸仏眼。諸仏因是得具五眼。仏三種身從方等生。是大法印。印涅槃海。如此海中能生三種仏清淨身。此三種身、人天福田等云云。

日蓮の教学を踏まえていればその仏身説について述べる場合、『四条金吾釈迦仏供養事』、あるいは『観心本尊抄』の該当箇所を引用するか、あるいは言及してしかるべきところである。ところが、『決権実義』では『普賢観経』の経説のみを解釈し、日蓮の遺文は引用せず、日蓮の教学という立場からは一切説明を加えていない。日相は「ここでは日蓮の説は必要ない。」と判断したとも考えられるが、もし日蓮の教義を認識していたなら、その上で無視したことは不自然である。

『決権実義』においては他の箇所『観心本尊抄』の引用が確認できる。そのことから、全く日蓮の教学に疎いとまでは言い難い。しかし、しかるべきところにおいて言及がないことはいささか不十分であると考えられる。これは執行氏が「宗旨の本義を以て浄土教学に対応するには十分ではなかったかの感がある。」⁽¹³⁾と記していることと合致する。

五 おわりに

仏力については、客からの批判に対して、「如来加力に由るが故に生ずると執著する者は、則ち外道他性の考えと同じである。」と解釈し、「仏力に任せて三業の善を修することを制止すると言うのではない。」と反駁している。

また、「仏願力は凡夫をして報仏を見ることをえしむ。」と解釈して、「阿弥陀仏国は報土であり、地前及び二乗は決し

て往観をえず。」という批判に反論している。これは善導の『観無量寿仏経疏』における説を踏襲している。

また光円日相は『決権実義』において、『普賢観経』の経説を用いて、親子の關係になぞらえて『法華経』を持つことを解釈した。この『普賢観経』の経文は『四条金吾釈迦仏供養事』において日蓮が三身を解釈するにあたって用いている箇所である。日蓮の宗学を踏まえていれば、三身について論ずる場合は凡そ日蓮の遺文に触れるべき要文である。

また『観心本尊抄』においても『普賢観経』の当該箇所の引用がある。しかしそのことには全く言及がなく、日相自身の解釈を記述しているに過ぎない。

したがって、日相が経文について学解していることは読み取ることができるものの、日蓮教学については学解が不充分であり、日蓮遺文についての知識は乏しいものであると推察される。すなわち、これは執行海秀氏が『日蓮宗教学史』において先に結論付けたことを立証するものである。

以上、日蓮宗教学史を検討するに当たっては、日蓮教団が関わる宗論の研究についても、具体的内容に踏み込んで考察し、互いに論争した対象にも目を向けてそれぞれの理論をも明確にする必要があると考える。

1 稲田海素稿「日蓮宗宗論書解題」(『大崎学報』一三、一九一〇)

義教撰『浄土真宗論客編』における日蓮宗への論駁(庵谷)

年)には「此書ハ密徒ノ月海浄土教ヲ貶シ及ヒ金橋山千手空遍力彈客鸞徒破会評決ヲ著シテ真宗ヲ斥セシヲ駁シ兼テ陳善記ヲ彈セシモノナリ。」とある。

2 『真宗全書』六〇・二八三頁上。

3 『浄土真宗論客編』、『真宗全書』六〇・二八三頁下。

4 『涅槃経疏』(南本)卷三六、大正一二・八五一頁下。また『涅槃経疏』卷七(大正三八・七八頁下)に「若因自是因、果自是果、則墮_二自性_一。由因故果、由果故因、則墮_二他性_一。因果因縁故因、因果因縁故果、則墮_二共性_一。非因非果故因果、墮_二無因性_一。皆墮_二断常_一。」とある。

5 『真宗全書』六〇・二七六頁下。

6 大正三七・二五〇頁中。

7 『浄土真宗論客編』、『真宗全書』六〇・二七九頁上。

8 六八丁左。

9 大正九・三九一頁上。

10 大正九・三九三頁上。

11 定遺一一八二―三頁。

12 定遺七一〇頁。

13 『日蓮宗教学史』(平楽寺書店、一九九六年)二九六頁。

〈キーワード〉 義教、『浄土真宗論客編』、光円日相、『決権実義』

(早稲田大学大学院)